

A Survey of Student and Professor Awareness of English Teaching and Learning at Toyohashi University of Technology

**Mitsuhiko Ito, Kazushi Ozaki, Masahito Nishimura,
Mihoko Kato, Manami Tamura, David Levin**

Abstract

This is a report based on a general survey given to undergraduate students and professors at Toyohashi University of Technology (TUT) about English education at TUT. Regarding students, the main purposes of the survey, conducted in the fall of 2005, were to find how students had studied English before enrolling in TUT, what the students thought of English teaching and learning at TUT, and how important they thought English was for their majors. As for the survey to professors, the main purposes were finding out instructor attitudes toward the teaching and learning of English at TUT and how necessary they felt the acquisition of English was for their students. In this study, attention is paid to the differences of awareness and attitudes between the professors and students toward English teaching and learning. Based on the results of this study, discussions on and refinements to the current English curriculum will be made in the near future at TUT with the aim of raising student English fluency, particularly in the areas of written and oral communication ability.

豊橋技術科学大学における 学生と教員の英語学習に対する意識

伊藤光彦, 尾碕一志, 加藤三保子, 田村真奈美, 西村政人, David Levin*

*五十音順

1. はじめに

本学においては、1986年に教員対象の英語学習に関する意識調査⁽¹⁾が実施され、1991年に学生対象の意識調査⁽²⁾が実施されて以来、しばらく意識調査は行われなかった。その後、2005年に英語教育に関する中期目標の実施計画の一環として教員と学生を対象に英語学習に対する意識調査が行われた。その結果は報告書として大学当局に提出されるとともに、本学の事務局ホームページを通して学内に公表された⁽³⁾。

本稿では、学内に公表されたデータから、学生と教員の意識の全体的な傾向を探りながら、特に教員と学生の英語学習に対する意識の差を検討し、本学における英語教育のあり方を考察する。

2. 調査及び集計分析の方法

2.1 調査方法

学生に対しては24項目の質問、教員に対しては14項目の質問からなるアンケート用紙を作成した(資料1, 2参照)。回答はマークシート記入方式とした。ただし、教員への質問の最後の2項目は自由記述である。

2.2 調査対象者及び実施時期

調査は学部の学生を対象とし、英語の授業時に配布・回収した。教員に対しては各系の事務室にアンケートボックスを置き、教員へ協力を依頼した。実施時期は2005年度2学期(9月～11月)であった。

2.3 集計及び分析の方法

集計は回答されたマークシートをリーダーで読み取り、教員の自由記述は別紙に転記して一覧表にまとめた。データの分析にはエクセルを利用し、棒グラフあるいは円グラフを用いて実数あるいはパーセントで表記した。これらの資料およびデータの詳細については、注3で示されているホームページ上の報告書を参照されたい。

3. 結果及び分析

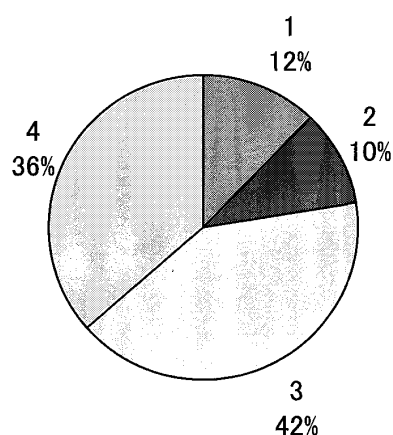
3.1 学生対象アンケート回答者数および回収率

学生対象の回答者数および回収率は以下のとおりである。

表1 各系の学生回答者数および回収率

学年 \ 系	1	2	3	4	5	6	7	8	計	対象者数	回収率%
1年	19	16	12	15	11	17	14	11	115	123	93.5
2年	12	15	15	11	14	12	10	7	96	128	75.0
3年	60	49	58	53	42	43	54	28	387	460	84.6
4年	44	60	49	35	29	42	47	33	339	513	66.7
計	135	140	134	114	96	114	125	79	947	1,224	77.0

学年別回答者の構成比率



1：1年生 2：2年生 3：3年生 4：4年生

図1 学年別回答者の構成比率

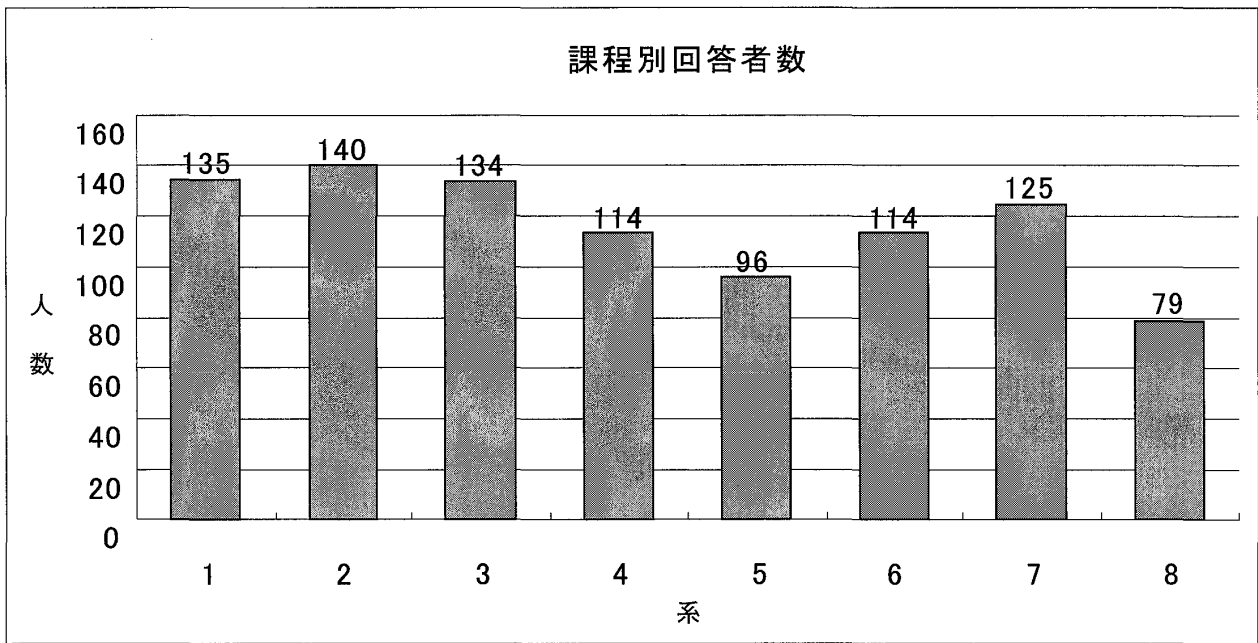
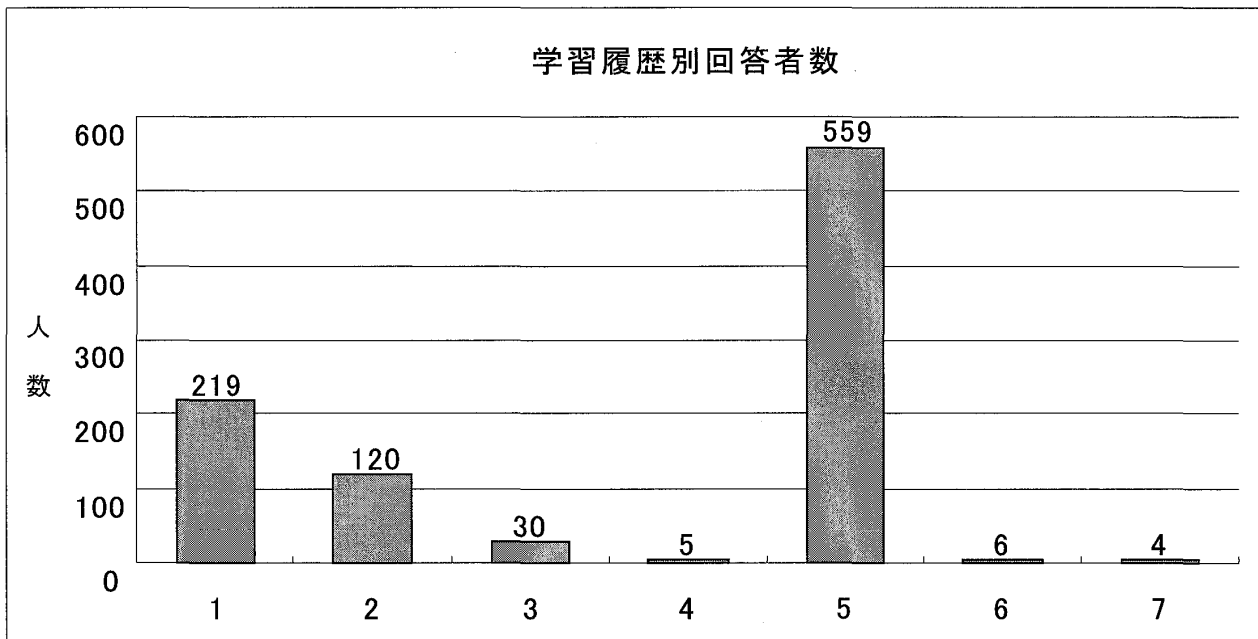


図2 課程別回答者数

942名の学生の教育履歴を変数とした度数分布は以下のとおりである。



- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1：普通高校（1年次入学） | 2：工業高校（1年次入学） |
| 3：帰国子女，外国人留学生（1年次入学） | 4：その他（1年次入学） |
| 5：高等専門学校（3年次編入） | 6：外国人留学生（3年次編入） |
| 7：その他（3年次編入） | |

図3 学習履歴別回答者数

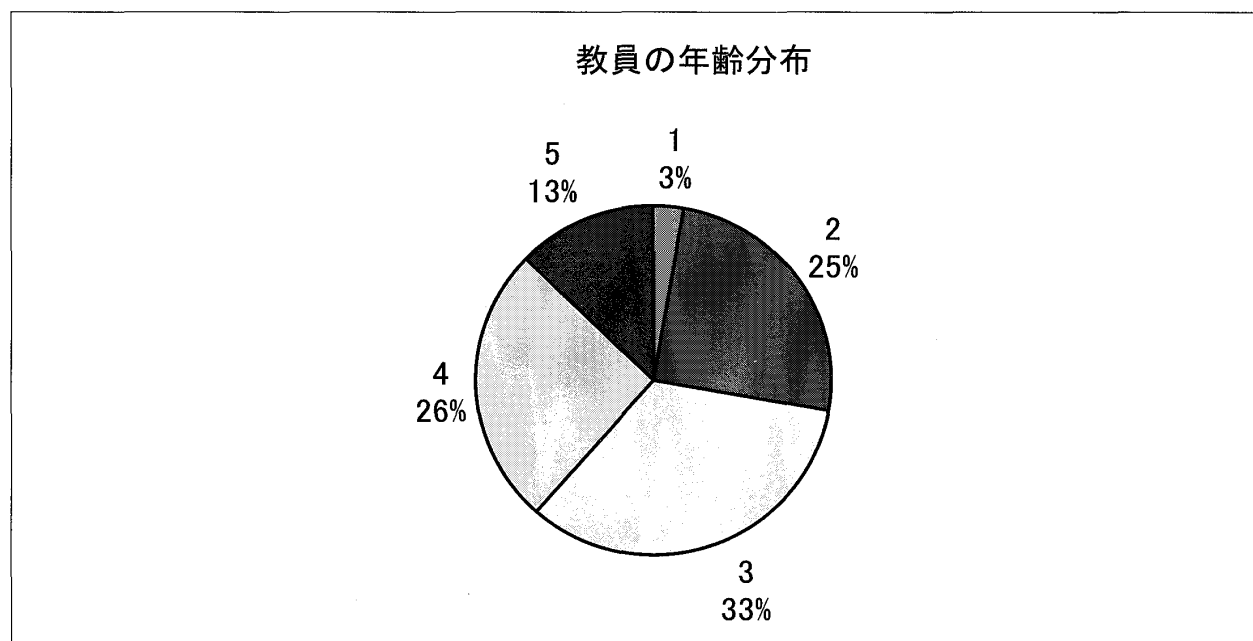
4.2 教員対象アンケート

センター所属の教員は関連の系に含めて回収したので、センターとしての回答者数は表れていない。また、英語担当の教員6名はアンケートの対象としなかった。当時のアンケート対象教員数が207名であるので、回収率は約67.1%である。各系における回答者数とその年代分布は以下のとおりである。

表2 各系の教員回答者数および回答者年代分布

年代 \ 系	1系	2	3	4	5	6	7	8	9	計
20代	0	0	0	2	0	1	0	1	0	4
30代	3	3	6	7	3	3	5	3	2	35
40代	5	5	3	4	7	5	5	9	4	47
50代	3	6	3	0	4	5	4	3	7	35
60代	3	2	3	2	3	2	1	1	1	18
計	14	16	15	15	17	16	15	17	14	139

教員の年齢分布を見ると以下のとおりである。



1: 20代 2: 30代 3: 40代 4: 50代 5: 60代

図4 教員の年齢分布

所属の記入が無かった2名の回答は分析の対象とはしなかった。また、各系における教歴の分

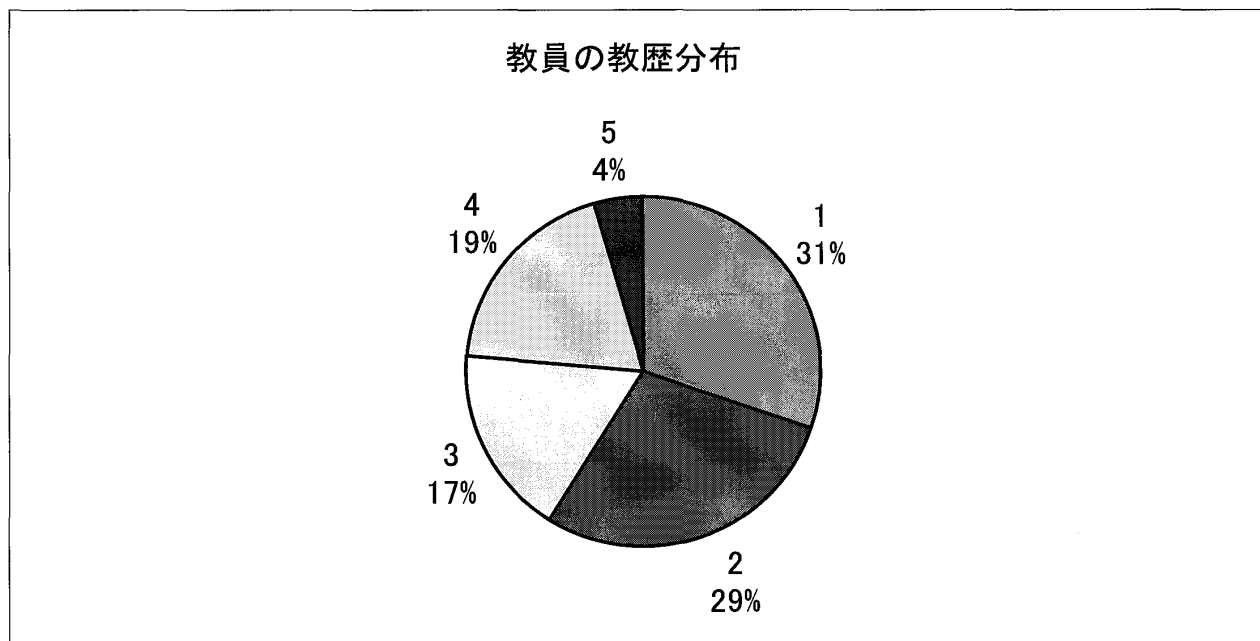
布は以下のとおりである。

表3 回答に見られる各系の教歴分布

教歴 \ 系	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
A	8	6	3	3	5	6	4	1	6	42
B	4	5	2	3	7	3	5	6	5	40
C	1	2	4	3	3	2	4	4	1	24
D	1	2	6	3	2	3	2	6	2	27
E	0	1	0	3	0	2	0	0	0	6
計	14	16	15	15	17	16	15	17	14	139

A : 20年以上 B : 10年以上20年未満 C : 5年以上10年未満 D : 1年以上5年未満
E : 1年未満

教歴を変数として分布を見ると以下のとおりである。



1 : 20年以上 2 : 10年以上20年未満 3 : 5年以上10年未満 4 : 1年以上5年未満
5 : 1年未満

図5 教員の教歴分布

5. 分析

グラフによる提示は注記したホームページに各種掲載してあるので⁽⁴⁾、本論では累計頻度数ま

たはパーセントを中心とした数値を主に用いることとする。

5.1 学生のアンケートにもとづく分析

5.1.1 出身校での授業時間、授業時数、授業内容等について

高校では1コマは50分がほとんどであり（70.2%から76.5%）、高専では90分が47%である。最終学年での授業時間数に関しては、普通高校（最多頻度3回32.1%）、工業高校（最多頻度2回55%）、高専（最多頻度1回50.0%）とそれぞれ時間数に差があることが明らかとなった。特に、高専出身者の15%が最終学年の一年間、英語に接しないで本学に入学している事実が確認できた。さらに、英語学習の時間数に対する意識の差が普通高校出身者と工業高校・高専出身者の間で見られる。特に、工業高校・高専の約40%の学生が「出身校在学中の英語総時間数」について「ちょうどよい」と回答しているが、彼らは英語を積極的に学習しようとする意識が薄いと解釈できる。

また、出身校では読解、文法中心の英語学習をしてきたことが明らかとなった。学生全体の回答の1位「読解」（累計頻度数636）、2位「文法」（累計頻度数496）は他の4項目（累計頻度数それぞれ「語彙」109、「作文」80、「スピーキング」68、「リスニング」157）を圧倒的に引き離して高い比率を示す。また、英語力が如実に明らかとなる作文の指導を受けていない（累計頻度数80）ことも明らかとなった。近年、中学では「文法」を教えないで「オーラルコミュニケーション」を重視するといわれているが、本学入学前の英語教育では「リスニング」（累計頻度数157）、「スピーキング」（累計頻度数68）はあまり指導されていない。

5.1.2 本学での英語教育について

① 授業時間数について

授業時間数について、学生全体では週2回という回答が多い（56.8%）。これはカリキュラム上、週2回外国語科目としての英語を開講していることがそのまま数値に反映されている。「英語の総授業時間数」には専門系で開講している英語も含んでいる。2年生（60.4%）、3年生（59.8%）、4年生（52.9%）が50%強の数値で英語の総授業時間数を「ちょうど良い」と考えているのに比べ、1年生（45.2%）では「ちょうど良い」とする数値が1番少ない。系や研究室で開講している英語の授業については、4年生がもっとも多く受講をしている（32%）。ただし、そのような授業は提供されていても受けていない率も下級生に比べて高くなっている（9%）。

② 本学入学後の英語の授業について

全体的に「読解」（累計頻度数674）、「文法」（累計頻度数601）に重点が置かれているのは、現在3年次全クラスを対象に統一教材を用いて「読解」と「文法」を教えていることによる。授業形態に関しては、「主に日本語と英語で」授業を行い（回答数1位、累計頻度数561）、「指名された者だけが発言し」（回答数2位、累計頻度数360）、「小テストは頻繁に行われることはなかった」（回答数7位、累計頻度数93）、そして、「全体あるいはグループで話し合う」ことはほとんど無

かった（回答数8位で最下位，累計頻度数52）という回答が得られたが，これはクラスサイズが大きいことによる影響と思われる。現在の授業形態を不満とするものが全体で33.6%いるが，その大きな理由は「会話力がつかないから」（回答数1位，累計頻度数212）であった。

本学入学後に力がついたのは，「読解」（回答数1位，累計頻度数374），「文法」（回答数2位，累計頻度数266）であるという回答は，現在の授業内容に即した結果である。特に，3年生で「講読」（回答数2位，累計頻度127），「文法」（回答数1位，累計頻度数157）の力がついたとする結果が得られたのは，週二回の授業を読解と文法に重点をおいてすすめているカリキュラムがうまく機能していることを示す。

英語力が低下したとする者は，学力全般の低下と判断しているようである（累計頻度数それぞれ「読解」212，「文法」298，「語彙」253，「作文」296，「スピーキング」297，「リスニング」271）。個別に分析すれば，1年生で「文法」の力が落ちた（回答数1位，累計頻度数70）とするのは，大学入試のために詰め込んだ英語がしっかりと身に付いたものではなかったことを表しているのであろう。「語彙力」の低下（回答数3位，累計頻度数48）にも同じようなことがいえる。しかし，「作文力」の低下（回答数2位，累計頻度数49）については，入学前にもさほど作文指導を受けていないことから，何をもって力が低下したと判断したのか，今回の調査では解釈が困難である。

③ 英語学習上の問題点

本学の抱える問題点としては，全体的に「専門の授業が忙しすぎる」（回答数1位，累計頻度数525）とする回答が圧倒的に多い。英語学習（予習，復習，自主学習）に割く時間が取れないことが容易に推測できる。これは英語学習を支援をする上での根本的な問題である。1年生では英語学習の時間数が少ないとする比率が相対的に高い（回答数1位，累計頻度数31）。このことから，1年生対象にはもっと英語の開講科目を増やしてもよさそうである。また1年生では「授業方法に工夫が足りない」（回答数2位，累計頻度数30）とする率が2位と高い。学生がどのような授業を希望するのかについては不満を示す学生のなかに「会話力が身につかない」（回答数1位，累計頻度27）という回答があることから，英会話の学習時間を望んでいることがうかがえる。また，2年生でも「会話力が身につかない」（回答数1位，累計頻度数26）とする回答が目立つ。学生にとっては，本学入学後も高校，高専と同じように読解や文法に力点を置いた一斉授業がおこなわれていることに不満を感じているのかもしれない。しかし，現在のように多人数クラスで授業を行う環境では，教員にとって授業形態はある程度固定化される。クラスサイズが40～50名にもなると，会話を取り入れた教育活動は効果的にできるだろうか。また，「専門の授業が忙しすぎる」という学生には，時間をかけなければならない課題を与えても，予習，復習をする時間はないであろう。英語の時間に小テストなどをやっても，あまり得点できない理由の一つはここにもあると思われる。学生にとっては，英語の授業で小テストなどをこまめに実施されると，専門の授業のための時間が削られることになり，ますます身動きがとれない状況に陥るようである。

上述のように、学習者の問題点としては、(専門の勉強が忙しすぎて)「時間が取れない」(回答数1位, 累計頻度数463) ことが最大の要因にあげている。しかし、学年が上がるごとに、また、将来勤務先で英語の必要性が増すことは確かであるにもかかわらず、「学習意欲がわかなくて」(回答数2位, 累計頻度数402), 「学習目的がはっきりしない」(回答数4位, 累計頻度数128) という回答が多いのは問題である。本学の目指す教育と、開発業務に携わるエンジニアになるとはどんなことであり、将来何が要求されるのかが自覚できていないと思われる。さらに、受験勉強を通して英語の学習方法を獲得してきたであろう普通高校出身者でさえ「学習方法がよくわからない」(回答数1位, 累計頻度数53) とする回答が3位を占める。この結果から、やはりこれまでの英語学習が、受験のためだけの一時的な詰め込み学習であったことがうかがわれる。

5.1.3 本学での英語教育に対する要望と達成目標

① 要望

学生全体では、「スピーキング」(回答数1位, 累計頻度数451), 「リスニング」(回答数2位, 累計頻度数408) に重点を置いて欲しいという回答が多い。現在の授業形態で不満とする理由と一致する。学生は「会話」とはいかなる言語活動であるかを理解しないまま、「英会話」ができたらいいと願っているようだ。「リーディング」や「音読」の力は、「スピーキング」, 「リスニング」にも深く関係しており、会話には文法力も基本になっているのである。学生たちを見ていると、このことが正しく認識されていないと思われる。

資格試験のための授業については、「実施を希望する」(回答数1位, 累計頻度数424) が多い。特に TOEIC 対策授業の開設の検討は必要と思われる。しかし、TOEIC 対策の授業はあくまでも「得点を伸ばすための受験対策」を目的とするものであり、大学の英語授業をこれに当てることは賛否両論がある。

「読む・書く・聴く・話す」の4技能の学び方については、「4技能をまんべんなく学ぶ授業」(回答数3位, 累計頻度数257) と「4技能を個別に学ぶ授業」(回答数2位, 累計頻度数270) が同じ程度に支持されている。この希望を取り入れるとすれば、基礎的な学習では4技能をまんべんなく学習し、発展段階では希望に応じてある技能を高めるように授業科目配置をするとよい。また、少人数教育を支持する率も高い(回答数4位, 累計頻度数233) ので、クラスサイズを小さくすることが必要である。

② 達成目標

4技能の達成目標に関しては以下のような分析ができる。「英文読解」の達成目標で「専門の文献を十分読みこなせる程度」とする回答は4年生(50.1%)で一番多く2年生(48.9%), 3年生(47.0%), 1年生(46.5%)と数値が低くなる。課程別では「専門の文献を十分読みこなせる程度」を目指している物質工学の学生が44.2%と目標が最も高い。物質工学系では早い時期から専門英語が導入されているが、その実績がこのような数値になっているようだ。

「英作文」の達成目標は「英文読解」に比べれば低いですが、概して高いといえる。学生全体の回答からは、「レポートが書ける程度」(29.5%)、「仕事に必要な文章が書ける程度」(38.2%)が多く見られる。この項目でも2年生が「論文が書ける程度」25.5%と最上級レベルを目指している。「英会話」の達成目標は学生全体では「外国人教師や留学生、海外からの研究者と日常的なことから話ができる程度」(44%)が一番多い。しかし、「外国人教師や留学生、海外からの研究者と専門的なことから話ができる程度」では1年生が34.8%、2年生は28.4%と全体の23%を超えている。

「英語聴解力」の達成目標では学生全体では「大学や職場での日常的なことから話の聞き取れる程度」(35.5%)が一番多い。しかしこれより高い目標を持つ回答が全体で50.3%ある。この50.3%に対して1年生は65.8%、2年生は58.5%と全体よりも高い数値を示す。しかし、高い目標を達成するための努力はあまりなされていないようだ。

5.1.4 授業以外での英語学習

「家庭学習」を週に30分未満とする学生が全体で56.35%いる。基本的に週2回の授業の予習復習が30分未満ということである。この程度の学習時間だけで前節で明らかとなった高い目標が達成できるとは思えない。このため上記4技能の達成目標は単なる願望に過ぎないと解釈できる。自主学習では「その他」の回答がとりわけ数値が高い(回答数1位、累計頻度314)が、どのような自主学習なのかについては具体的な記述を得ていないが、4年生になって「研究室で勉強する」という数値が高かった(回答数1位、累計頻度数130)ことから、本学では研究室配属後に英語学習の機会が増えていることがわかる。また、物質工学の学生が他のどの課程よりも「研究室で勉強する」とする数値(回答数1位、累計頻度数43)が高かったことも学習環境の影響の大きさを示す。

検定試験の受験傾向としては全体的には英検が1位(累計頻度数526)でTOEICが2位(累計頻度数418)である。しかし、1・2年生と3・4年生でそれぞれ特徴がある。前者は英検を主に受験し(1年生累計頻度数50、2年生累計頻度数50)、後者と比べると検定試験を受けた事のない者の比率が高い(1年生累計頻度数31、2年生累計頻度数35)。後者は英検(3年生累計頻度数211、4年生累計頻度数187)ばかりでなくTOEIC(3年生累計頻度数180、4年生累計頻度数227)の受験比率も高くなっている。一般基礎Ⅲの英語の単位として英検、TOEIC等の得点が認められているので今後さらにこれら資格試験を受験する学生が増えることが予測できる⁽⁵⁾。

5.2 教員のアンケートにもとづく分析

5.2.1 学生の英語力の把握と対応

① 英語力の把握

学生の英語力を把握する方法として、「英文を読ませ、英語力を把握する」(教員全体で78.6%)という回答が多かったのは予想どおりである。また、TOEIC等の検定試験の得点により英語力を

把握する課程が生産システム工学で58%と顕著である。その一方で、40代の教員の回答は「英語力を把握していない」とする比率が他のどの年代よりも高い(15.1%)。学生の英語力が不十分と感じる時に関しては、「英語の文章を読んで理解できないとき」が全体の58.3%を占める。ついで「レポートが英語で書けないとき」(14.2%)であった。この質問項目に対する自由記述には、研究室の研究活動、教育活動をとおして「国際会議での発表の時」という高いレベルから、「授業で出てきた簡単な単語を受講者の誰も知らない時」という日常教育活動のレベルまで記述されていた。

教員の全体ではほぼすべての技能について、学生の力が劣っていると認めている(累計頻度数それぞれ「読解」88,「文法」81,「語彙」88,「作文」88,「スピーキング」101,「リスニング」83)。特に、「話す」力が劣っていると判断されているが「話す」力は「書く」力と同様に、受信よりも発信によるコミュニケーション手段であるため、その能力が表に出ることにより他者からの評価を受けやすい。このため、学生の話す能力は容易にチェックできるのであろう。

② 学生, 学習上の問題点

学習上の問題点について、教員全体の回答はすべての項目にわたってほぼ均等に分布しているが(累計頻度数それぞれ「授業時間が少ない」36,「授業方法に工夫が足りない」28,「英語のネイティブ・スピーカーによる授業が少ない」40,「クラスの人数が多すぎる」31,「専門の勉強が忙しすぎる」39,「その他」37), 課程により順位づけは多様である。「ネイティブ・スピーカーによる授業が少ない」を1位の回答とする課程もあれば(生産システム工学累計頻度数8, 電気・電子工学累計頻度数6, 人文・社会工学累計頻度数6), 「授業方法に工夫が足りない」を1位の回答とする課程もある(物質工学累計頻度数7)。また, 「授業時間が少ない」を1位の回答とする課程もある(建設工学累計頻度数7, 知識情報工学累計頻度数6)。そして, 「専門の勉強が忙しすぎる」を1位の回答とする課程や(電気・電子工学累計頻度数6, 建設工学累計頻度数7), 「その他」を1位の回答とする課程もある(エコロジー工学累計頻度数9)。授業方法に工夫が足りない」とする欄の記述は, 授業方法への批判ではなく, 教材, 教えるレベルに対する批判が大部分であった。また, 教科書が易しすぎるとのコメントがある一方で, 中学校レベルの英文が分からない学生がいることを指摘するコメントがある。「その他」の記述欄では, 教材, 学生の学習意欲, 英語学習総時間, 英語担当教員の教育姿勢に関したものが上げられる。

学生自身の問題に関しては, 「学習意欲がない」(回答数2位, 累計頻度数68), 「学習方法がよくわかっていない」(回答数1位, 累計頻度数72), 「学習目的がはっきりしていない」(回答数3位, 累計頻度数58)と教員は感じている。しかし, 教員側は学生が英語学習に「時間が十分に取れない」とは思っていない。「その他」の項目でのコメントには「取れないのではなく, 時間をかけていない」と書かれていることから, 学生が「時間を取らない」ことに対する教員の嘆きが聞こえてくる。

③ 系，研究室での対応

英語学習については，各課程，研究室で独自に工夫をしているところがほとんどである。「一般教養の英語とは別に英語の授業を実施している」系が増え，実施時間が増えている⁽³⁾。機械システム工学では「系あるいは研究室で英語の課外指導をしている」が1位を占める（累計頻度数10）。また，TOEICの受験を勧めている課程ではこの数値が高いようだ（生産システム工学累計頻度数13，電気・電子工学累計頻度数11，知識情報工学累計頻度数13，エコロジー工学累計頻度数10）。「その他」の自由記述欄からは「研究室で英語の課外指導をしている」実態がより明らかになっている⁽⁶⁾。

5.2.2 英語教育に対する要望

① 要望

教員全体からは「読解」に重点を置くという回答が1位で（累計頻度数86）あった。このほかのスキルについては同程度の数値が並ぶ結果となった。授業形態に関しては，教員全体の反応からはプレースメントテストで少人数のクラスに分ける（回答数1位，累計頻度数46），クラスを「技能別」にして「まんべんなく」学習する（回答数1位，累計度数46）と同時に，資格試験のための授業を行う（回答数4位，累計度数42）ことを希望している。しかし，課程ごとに見ると重点が異なる場合もあり，9課程のうち5つの課程がプレースメントテストによるクラス分けに限らず，「少人数教育」を1位とする。「その他」の自由記述欄には各種のコメントがあったが，その中には「英語の問題ではなく教育課程に関わる問題」が提起されていた。

② 達成目標

「英文読解」に関しては91.8%の教員が「専門の文献を」「十分に読みこなす」（26.1%）なり「大体分かる」（65.7%）ことを学生に期待している。回答者の年齢別に見ると，年齢が上がるにつれて学生に高い読解力を期待しながらも，一方で低いレベルも容認する態度が現れてくる。60代で「e-mailが読める程度」とする回答が12.5%であるが，他の年代と比べるとこの数値は極めて高い。「その他」の自由記述欄では，低いレベルを容認する内容の記述がある。

「英作文」に関しては，教員全体では「論文が書ける程度」（5.9%），「レポートが書ける程度」（28.9%）と「英文読解」に比べると学生への期待は高くない。課程別では「論文が書ける程度」を最も期待するのは人文・社会工学（28.6%）である。年齢別にみると，40代では10.9%が「論文が書ける程度」を要求するが，50代（5.9%），60代（6.7%）ではこの数値は相対的に低い。60代では「日常の手紙やe-mailが書ける程度」の比率が30代から50代の比率と比べて高い（53.3%）。これは，長年の経験で学生の現状を十分に認識しているからであろう。

「英会話」については，教員全体では「留学生，海外からの研究者と日常的な事柄について話ができる程度」が最も多く（55.9%），「学会発表や質疑応答ができる程度」とする率は8.8%ある。話す力に対する要求は課程，年代，教歴により温度差がある。また，課程ごとに要求度が異なっ

ている⁽⁷⁾。「聴解力」についてもおおよそ「会話力」への回答、反応と同じ傾向がある。教員全体では「学会発表や質疑応答ができる程度」(9.0%)、「大学や職場での専門的な事柄についての話が聞き取れる程度」(24.6%)、「大学や職場での日常的な事柄についての話が聞き取れる程度」(43.3%)、「私的な場所での日常会話が聞き取れる程度」(20.1%)、「その他」(3.0%)である。教員の回答からは、「聴く力」と「話す力」を切り離さずに表裏一体のスキルとして認識していることがわかるが、コミュニケーションはいくら話す力があっても聴けなければ成立しない。ある意味では話すことよりも聴くことが先にあることも確認しておきたい。

③ 自由記述欄

この欄ではそれぞれ思いのこもったコメントが多数寄せられた。工学担当者の授業に対する工夫、英語教育への想い、英語担当教員への期待などについて貴重なご意見をいただいた。詳細はホームページでの報告を参照いただきたい⁽⁸⁾。

6 アンケート結果の分析に基づいた考察

6.1 学生の出身校における英語教育について

本学では入学形態が多岐にわたり、普通高校、工業高校、高専では、それぞれ最終学年での英語授業時間数、および英語総時間数に差がある。また普通高校より時間数の少ない工業高校、高専出身者が英語の時間数を「適当」であったと感じているのは英語学習に対する意識がどちらかといえば低かったことの一面と解釈できる。

6.2 本学での英語教育に関する諸問題

① 学生のアンケートから

本学の総授業時間数についての判断は、出身により多少の差がある。開講時間数が増えればもっと受講を希望する学生がいるのであれば、そのような学生を対象に時間数を増やすことも検討せねばならない。ただし、専門課程で開講している英語の時間数と一般英語の時間数を総合的に合わせ判断すべきであろう。

英語の授業形態については、不満とする学生が30%いる。その大部分が「聴き」「話す」力が身につかないことを理由とし、大学入学後に「話す力」「聴く力」が落ちたとする。しかし、入学前に高校、高専で「聴く力」「話す力」はほとんど養っていないのであるから、英語が話せるようになりたいという願望から会話に関する力が落ちたと反応したと解釈できる。「読解」の授業でも音読がおこなわれるが、音読が上手にできなければ「聴き」「話す」ことが上達しないことを学生は理解していないようである。「聴く」「話す」力は「読む」力と無関係ではない。

入学後に力がついたスキルとしては、「読解」「文法」をあげているが、提供している授業内容と基本的に一致しており、力がついたという回答が得られることは学習者、教員ともに励みにな

る。

② 学生のアンケートと教員のアンケートから

本学での英語学習上の問題点について、学生と教員の間認識の差がみられた。学生は「専門の勉強が忙しすぎる」とするのに対し、教員はこの点をあまり認識していない傾向がある。しかし、学生がこのように認識しているなら、どの項目よりも先にこの点で学習環境を改善することが検討されるべきである。家庭学習の時間の少なさもこの現実の一部を示していると解釈できる。このことに関連して学生が取得する単位数をみると、年間での取得単位が非常に多い⁹⁾。学生の学習時間を確保するためにも履修登録単位の上限を定める必要がある。

「ネイティブ・スピーカーによる授業」に関しては、日本人の英語教員の方がメリットが大きい場面も多々あるので、授業担当については慎重に検討すべきである。また、クラスサイズが大きいことにより授業方法が高校、高専と変わらないということも学生にとっては刺激が少ないと感じる要因の一つになっているのかもしれない。これらの問題は複眼的に検討する必要がある。

学習者自身の問題点としては、学生は「時間が十分に取れない」を第1位にあげている。次いで、「意欲がわからない」、「方法が分からない」、「目的不明確」と続く。これに対して、教員は「方法がわかっていない」を第1位にあげ、ついで「意欲がない」、「目的不明確」と続き、第4位に「時間が取れない」をあげている。このように、学生の意識と教員の意識にずれがある。学生の主張がすべてではないが、まず時間を与え、「創造的、指導的技術者になる」とはいかなることかを学生に理解させ納得させるところから指導することが必要ではなからうか。客観的には、学生の本学での立場、将来研究開発に携わるとはいかなることかが明確なはずであるのに、「目的不明確」、「学習意欲がない」のであれば、学生にとって英語学習は苦痛でしかないし、英語を教える教員にとっても教え甲斐のないものになる。学生の意識を変えるためにも、入学の早い時期から系や研究室で今以上に独自の工夫をしてもらえれば相乗効果として一般英語の効果もあがるであろう。

6.3 本学の英語教育に対する要望のまとめ：学生と教員のアンケート結果を受けて

学生は英語授業で「リスニング」、「スピーキング」に重点を置いて欲しいとする。教員は一部の課程で「スピーキング」に重点を置いてほしいとするが、多くは「読解」に重点を置くことを望んでいる。今後も、多くの教員が重点とする「読解」を核として授業を展開したいが、学生からの要望も取り入れるべく、この点は慎重に検討したい。

卒業時の読解力については、学生は25%が「専門の文献を十分に読みこなせる程度」、48%が「専門の文献の内容が大体わかる程度」とする。これに対して、教員は25%が「専門の文献を十分に読みこなせる程度」、66%が「専門の文献の内容が大体わかる程度」とする。学生と教員の意識の差がここでも見られる。特に、物質工学では教員、学生ともに（意識の差があるとはいえ）他のどの課程よりも高いレベルに目標を置いている。これは3年生からすでに研究室配属し、教

員が直接学生に英語習得の重要性を説いていることが大きな要因と判断できる。

卒業時の作文力については学生の間では課程間で大きな差はないが、教員の間では課程間で差が見られる。卒業時の英会話力については学生の意識と教員の意識がほぼ一致している。しかし一部では学生と教員の意識に差が見られる。学生の間ではどの課程もほぼ同じ傾向を示すが、教員の間で一部の課程で学生に高いレベルの英会話力を要求している。英語聴解力についても学生の意識、教員の意識は「会話力」に対する意識とほぼ同じ傾向が見られる。学生と教員の間で意識の差があるとはいえ、本節のこれまでの考察と第4節、第5節での分析結果から、学生、教員共に英語の4技能の目標レベルは高いところにあるといえる。質問項目の立て方は今回と同じではないが、1986年、1991年の調査結果と変わりなく今回も高い目標設定が見られる⁽¹⁰⁾。

上記の目標を達成するための英語教育をより効率的に行うためにはどうするか。学生は、「少人数教育」を希望し、「資格試験のための授業を実施」することも希望している。4技能に関しては、「4技能別にクラスを開講しすべてまんべんなく学習する」あるいは「4技能別のクラスを開講し、希望するものを選択できるようにする」としている。これに対して、教員は「プレースメントテストによるクラス分けを全ての学年で行い」、「少人数教育」を支持している。さらに、「クラスを4技能別にして、すべてをまんべんなく学習」し、「資格試験のための授業を実施する」とする。このように、教員と学生の間で意識の差があるが、特に学生はTOEICの点数をかなり意識しており、プレースメントテストで指定されたクラスに入るのではなく、自由選択のような形態を希望していることがわかる。

いずれの問題も英語の授業担当者だけで解決できる問題ではないので、全学的なカリキュラム等の検討が必要である。その際には今回の調査結果が参考となり得る。

7. 終わりに

以上、データをもとに数値を読み、解釈を加え、学生と教員の双方の考えを報告して考察を加えた。今回の調査では、近い将来検討されるであろう本学のカリキュラム検討に際し、英語教育のカリキュラムを「コミュニケーション能力の涵養」のためにどのように構築したらよいかを考えるうえで貴重なデータが得られた。今後も学生と教員からの声を大切に、よりいっそう効果的な英語教育が展開できるよう努めたい。

最後に、調査に際し協力いただいた各系の先生方ならびに学部学生の皆さんにお礼を申し上げます。

注

- 1 大呂義雄, 野澤一典「豊橋技術科学大学教官の英語教育に関する意識」『豊橋技術科学大学人文・社会工学系紀要』第8号(1986), pp. 109-133.
- 2 野澤一典, 大呂義雄, 野村武, 尾碇一志, 伊藤光彦, 西村政人, 加藤三保子「豊橋技術科学大学における学生の英語学習に対する意識と実態」『豊橋技術科学大学人文・社会工学系紀要』第13号(1991), pp. 109-172.
- 3 田村真奈美, 尾碇一志, 西村政人, 加藤三保子, 伊藤光彦, David Levin「豊橋技術科学大学英語教育に関するアンケート結果報告書(学生対象アンケートより)」, 「豊橋技術科学大学英語教育に関するアンケート結果報告書(教員対象アンケートより)」, 「教員アンケート記述一覧」, 「2005年度系別英語開講状況」: 豊橋技術科学大学事務局ホームページ(学内専用) 掲示(2006年5月)
- 4 注3参照
- 5 16年度の検定英語による単位認定者数は36人であり, 17年度の検定英語による単位認定者数は45人である。
- 6 注3参照
- 7 注3参照
- 8 注3参照
- 9 平成16年度の学生の年間平均取得単位数は以下のとおりである。学部1年生:42単位, 2年生:32単位, 3年生:46単位, 4年生20単位。また, 年間履修科目数の最高頻度数は以下のとおりである。学部1年生:51~60科目, 2年生:31~40科目, 3年生:41~50科目, 4年生:21~30科目(平成17年度認証評価資料5教育活動(21)「学生年間取得単位数」より)。平均単位数を単純に加えれば, 140単位である。しかし, 3学期制による数字上現れない学習内容の問題がある。また, 各学期最初の登録単位数は履修単位数を越えていることは十分にありうる。
- 10 注1, 2参照

資料 1

豊橋技術科学大学における英語教育に関する学生アンケート

I. あなた自身について

1. 学年

1. 1年次生 2. 2年次生 3. 3年次生 4. 4年次生

2. 所属課程

1. 機械システム工学 2. 生産システム工学 3. 電気・電子工学
4. 情報工学 5. 物質工学 6. 建設工学
7. 知識情報工学 8. エコロジー工学

3. 出身

1. 普通高校 (1年次入学) 2. 工業高校 (1年次入学)
3. 帰国子女, 外国人留学生 (1年次入学) 4. その他 (1年次入学)
5. 高等専門学校 (3年次編入) 6. 外国人留学生 (3年次編入)
7. その他 (3年次編入)

II. 出身校における英語教育について

4. 出身校における1回の授業時間は何分でしたか。

1. 90分 2. 60分 3. 50分 4. 45分 5. その他

5. 最終学年次に英語の授業は週何回ありましたか。

1. 0回 2. 1回 3. 2回 4. 3回 5. 4回 6. 5回以上

6. 出身校在学中の英語総時間数についてどう思いますか。

1. 多すぎる 2. やや多い 3. ちょうど良い 4. やや少ない 5. 少なすぎる

7. 出身校の英語の授業では何に重点が置かれていましたか。(複数解答可)

1. 読解 2. 文法 3. 語い 4. 作文 5. スピーキング 6. リスニング

III. 本学での英語教育について

8. 現在受講している英語の授業の回数は1週間にどれくらいですか。

1. 0回 2. 1回 3. 2回 4. 3回以上

9. 本学での英語の総授業時間数についてどう思いますか。

1. 多すぎる 2. やや多い 3. ちょうど良い 4. やや少ない 5. 少なすぎる

10. 本学で受講した英語の授業では何に重点が置かれていましたか。(複数回答可)

1. 読解 2. 文法 3. 語い 4. 作文 5. スピーキング 6. リスニング

11. 本学で受講した英語の授業はどのようにおこなわれていましたか。(複数回答可)

1. 主に英語だけで行われた。
2. 日本語と英語で行われた。
3. 主に日本語だけで行われた。
4. 指名された学生だけが発言した。
5. 全体,あるいはグループで話し合った。
6. コンピュータ, 視聴覚教材 (ビデオ, 音声テープ等) を利用した。
7. 小テストが頻繁に行われた。
8. 課題が頻繁に出された。

12. 本学の英語の授業形態をどう思いますか。

1. 大いに満足 2. 満足 3. 普通 4. 不満 5. 大いに不満

13. (上の質問に「不満」「大いに不満」と答えた人に)

本学の英語の授業形態に不満な理由は何ですか。(複数回答可)

1. 読解力が身につかないから。
2. 作文力が身につかないから。
3. 聴解力が身につかないから。

4. 会話力が身につかないから。
5. 文法力が身につかないから。
6. 語い力が身につかないから。
14. あなたの英語力で大学入学以来向上したと思われるのはどれですか。(複数回答可)
 1. 読解 2. 文法 3. 語い 4. 作文 5. スピーキング 6. リスニング
15. あなたの英語力で大学入学以来低下したと思われるのはどれですか。(複数回答可)
 1. 読解 2. 文法 3. 語い 4. 作文 5. スピーキング 6. リスニング
16. 本学で英語を学習する際の問題は何ですか。(複数回答可)
 1. 授業時間数が少ない。
 2. 授業方法に工夫が足りない。
 3. 英語のネイティブ・スピーカーによる授業が少ない。
 4. クラスの人数が多すぎる。
 5. 専門の勉強が忙しすぎる。
 6. その他
17. 英語を学習する際の問題点があるあなた自身にあるとしたら、それは何ですか。(複数回答可)
 1. 学習意欲がわからない。
 2. 学習方法が良く分からない。
 3. 英語を学習する目的がはっきりしない。
 4. 時間が十分に取れない。
 5. その他
18. 所属系や研究室で英語の授業(あるいは勉強会など)を受けていますか。
 1. 受けている 2. 授業はあるが受けていない 3. 開講されていない

IV. 本学での英語教育に対する要望

19. 本学の英語の授業では何に重点を置いてほしいですか。(複数回答可)
 1. 読解 2. 文法 3. 語い 4. 作文 5. スピーキング 6. リスニング
20. 学部卒業時にどの程度の英文読解力を身につけたいですか。
 1. 専門の文献を十分読みこなせる程度。
 2. 専門の文献の内容がだいたい分かる程度。
 3. 英語のホームページの内容がだいたい分かる程度。
 4. 英語の e-mail が読める程度。
21. 学部卒業時にどの程度の英作文力を身につけたいですか。
 1. 論文が書ける程度。
 2. レポートが書ける程度。
 3. 仕事に必要な文章が書ける程度。
 4. 日常の手紙や e-mail が書ける程度。
22. 学部卒業時にどの程度の英会話力を身につけたいですか。
 1. 学会発表や質疑応答ができる程度。
 2. 外国人教師や留学生、海外からの研究者と専門的なことについて話ができる程度。
 3. 外国人教師や留学生、海外からの研究者と日常的なことについて話ができる程度。
 4. 私的な海外旅行で使える程度。
23. 学部卒業時にどの程度の英語聴解力が身につけていたいですか。
 1. 学会発表や質疑応答が聞き取れる程度。
 2. 大学や職場での専門的な事柄についての話が聞き取れる程度。
 3. 大学や職場での日常的な事柄についての話が聞き取れる程度。
 4. 私的な場所での日常会話が聞き取れる程度。
24. 本学での英語教育をより効果的にするためにどのようなことを希望しますか。(複数回答可)
 1. クラスを「リーディング」「ライティング」など技能別にして、すべてをまんべんなく学習するようになる。
 2. クラスを「リーディング」「ライティング」など技能別にして、希望するものを選択して受講する

ようする。

3. プレイメントテストによるクラス分けを全ての学年で実施する。
4. プレイメントテストによるクラス分けを実施しない。
5. 少人数教育を実施する。
6. 資格試験（TOEIC 等）のための授業を実施する。

V. 授業以外での英語学習について

25. 現在授業以外で週にどのくらい英語学習に時間を当てていますか。
 1. 30分未満
 2. 30分以上1時間未満
 3. 1時間以上2時間未満
 4. 2時間以上3時間未満
 5. 3時間以上
26. 授業の予習，復習，課題などのほかに英語学習に関して行っていることがありますか。
(複数回答可)
 1. 所属している研究室で勉強している。
 2. コンピュータ教材やテレビ，ラジオ，DVD などを利用して勉強している。
 3. 英語（英会話）学校に通っている。
 4. 外国人留学生と英語で話すようにしている。
 5. その他
27. 英語の資格試験を受けたことがありますか。
 1. 英検（STEP）
 2. TOEIC
 3. TOEFL
 4. 工業英検
 5. その他
 6. 受けたことがない

以上です。ご協力有難うございました。

豊橋技術科学大学における英語教育に関する教員アンケート

I. あなた自身について

1. 所属

- | | | |
|-------------|-------------|------------|
| 1. 機械システム工学 | 2. 生産システム工学 | 3. 電気・電子工学 |
| 4. 情報工学 | 5. 物質工学 | 6. 建設工学 |
| 7. 知識情報工学 | 8. エコロジー工学 | 9. 人文・社会工学 |

2. 年齢

- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|----------|
| 1. 20代 | 2. 30代 | 3. 40代 | 4. 50代 | 5. 60代以上 |
|--------|--------|--------|--------|----------|

3. 教歴

- | | | |
|-------------|---------------|--------------|
| 1. 20年以上 | 2. 10年以上20年未満 | 3. 5年以上10年未満 |
| 4. 1年以上5年未満 | 5. 1年未満 | |

II. 本学の学生の英語力について

4. あなたは学生の英語力をどのような方法で把握していますか。

1. 英語の文章を読ませる。
2. 英語でレポートを書かせる。
3. 資格試験（TOEIC等）を受けさせる。
4. 特に何もしていないが、だいたい把握している。
5. なにもしておらず、英語力については把握していない。

5. 学生の英語力が不十分だと最も感じるのはどのようなときですか。

1. 英語の文章を読んで理解できないとき。
2. レポート等を英語で書けないとき。
3. 資格試験（TOEIC等）の結果を見たとき。
4. 外国人教師や留学生とのコミュニケーションができないとき。
5. その他（具体的に： ）

6. 学生の英語力で劣っているのはどれだと思いますか。（複数回答可）

- | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-----------|----------|
| 1. 読解 | 2. 文法 | 3. 語い | 4. 作文 | 5. スピーキング | 6. リスニング |
|-------|-------|-------|-------|-----------|----------|

7. 本学で英語を学習する際の問題は何ですか。（複数回答可）

1. 授業時間数が少ない。
2. 業方法に工夫が足りない。（そう考える理由： ）
3. 英語のネイティブ・スピーカーによる授業が少ない。
4. クラスの人数が多すぎる。
5. 専門の勉強が忙しすぎる。
6. その他

8. 英語を学習する際の問題点が学生自身にあるとしたら、それは何ですか。（複数回答可）

1. 学習意欲がない。
2. 習方法が良く分かっていない。
3. 英語を学習する目的がはっきりしていない。
4. 時間が十分に取れない。
5. その他

9. 英語学習について系や研究室で独自に何か工夫をしていますか。（複数回答可）

1. 一般教養の英語とは別に系で英語の授業を実施している。
2. 系あるいは研究室で英語の課外指導をしている。
3. 系あるいは研究室で英語学習について助言をしている。
4. 特に何もしていない。
5. その他（具体的に： ）

Ⅲ. 本学の英語教育に対する要望

10. 英語の授業では何に重点を置いて欲しいですか。(複数回答可)
1. 読解
 2. 文法
 3. 語い
 4. 作文
 5. スピーキング
 6. リスニング
11. 学部卒業時にどの程度の英文読解力を身に付けていて欲しいですか。
1. 専門の文献を十分読みこなせる程度。
 2. 専門の文献の内容がだいたい分かる程度。
 3. 英語のホームページの内容がだいたい分かる程度。
 4. 英語の e-mail が読める程度。
 5. その他(具体的に:)
12. 学部卒業時にどの程度の英作文力を身に付けていて欲しいですか。
1. 論文が書ける程度。
 2. レポートが書ける程度。
 3. 仕事に必要な文章が書ける程度。
 4. 日常の手紙や e-mail が書ける程度。
 5. その他(具体的に:)
13. 学部卒業時にどの程度の英会話力を身に付けていて欲しいですか。
1. 学会発表や質疑応答ができる程度。
 2. 外国人教師や留学生, 海外からの研究者と専門的なことについて話ができる程度。
 3. 外国人教師や留学生, 海外からの研究者と日常的なことについて話ができる程度。
 4. 私的な海外旅行で使える程度。
 5. その他(具体的に:)
14. 学部卒業時, 学生にどの程度の英語聴解力を身に付けていて欲しいですか。
1. 学会発表や質疑応答が聞き取れる程度。
 2. 大学や職場での専門的な事柄についての話が聞き取れる程度。
 3. 大学や職場での日常的な事柄についての話が聞き取れる程度。
 4. 私的な場所での日常会話が聞き取れる程度。
 5. その他(具体的に:)
15. 本学での英語教育をより効果的にするためにどのようなことを希望しますか。(複数回答可)
1. クラスを「リーディング」「ライティング」など技能別にして, すべてをまんべんなく学習するようにする。
 2. クラスを「リーディング」「ライティング」など技能別にして, 希望するものを選択して受講できるようにする。
 3. プレイスメントテストによるクラス分けを全ての学年で実施する。
 4. プレイスメントテストによるクラス分けを実施しない。
 5. 少人数教育を実施する。
 6. 資格試験(TOEIC 等) のための授業を実施する。
 7. その他(具体的に:)

Ⅳ. その他(自由記述)

16. 英語学習について学生に何か具体的な助言をしていましたら, その内容をお書きください。
17. その他ご意見がありましたらご自由にお書きください。

以上です。ご協力ありがとうございました。